第1分科会

第7分散会

Ⅰ はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。協力者から次のように呼びかけられた。「私たちは、子供をめぐる差別の現実から深く学びながら、すべての子どもたちが部落問題をはじめとする様々な人権問題を正しく認識し、その解決に向けた意欲と実践力を高めることを目指してきた。様々な状況にある子どもたちが、命、心、体の危機を訴えています。そこには差別の現実が深く関連している。だからこそ、私たちは１人１人の子どもの生活実態を把握し、課題を明らかにしなければならない。また、 部落問題学習は、 自らがどのように生きるかを問い、全ての人が差別を許さない社会の創造に向けた生き方を培っていく学習として実践されなければならない。部落問題への関心や認識の低下が様々な調査でも明らかになり、 インターネット上でも差別と偏見が広がっている現状において、すべての学校園で、 部落差別を解消していくための教育内容の想像が大切である。それは、部落問題だけでなく、すべての人権問題についても重なること。これまで積み上げてきた人権、部落問題学習を生かして、 部落差別をはじめ、あらゆる差別を許さない生き方を育もう。子どもたちにとって最善の利益を保証し、反差別の教育内容を進化、発展させよう。」

この後、討議の柱が確認され、報告、討論に入った。

Ⅱ 報告及び質疑討論の概要

―報告１―㉚

「ひと」を大切にできる生徒の育成

（徳島県人教）

―主な質疑と意見―

兵庫　講師を招いて 教育集会所っていうのはどういうふうな位置づけか。学校の中に設けられているのか。それとも地域の中に何かそういう集会所のようなものがあるのか。

報告者　この教育集会所は、学校のものではなく、吉野川市の地域の中にあるもの。

兵庫　地域の中でどういう役割であるか。

報告者　元々は辺りがこれまで差別を受けてきていた地区で、当時の学力保障をするというような目的で地域に作られた。単なる勉強面だけではなくて、差別に立ち向かっていけるとか、差別に負けない強い子どもを育てていくというような思いが積み重なってできた。地域の児童生徒が、そこで活動を日々している。

神奈川　人権集会を立ち上げた時の熱はその時はいいが、だんだん人が入れ替わると集会を続けてたとしても形骸化していくことが多いと思うが、それが 40 年間もしっかり続けてこれた秘訣というか、学校で大事にされていることとか取り組みとか、何かあるか。

報告者　私自身もこの中学校が母校。本校の廊下の中に、掲示物として「人権学習は中途半端にやったらしんどい、本気でやったら面白い」というような掲示がある。本気で自分の意見を出して、本気でみんなの言ってることをしっかり受け止めていくっていうことができてきたからこそ 40 年間も続いてきたのではないか。

兵庫　交流学習について。1 つ目は、講師を招いて国際理解を深めるための講座やワークショップをしたっていうことだが、具体的にどんなものをされたのか。2 つ目は、第 1 学年の総合的な学習の時間に、小学校の総合学習との連携みたいなのはあるのか、どう繋がっているのか。

報告者　１つ目、本校の職員の中にも JAICA との関係が深い教員の紹介で講師を呼んでもらって、子どもたちに歴史や文化を伝えるような活動をしている。２つ目、小学校との連携ということはできてないかもしれない。

兵庫　人権集会の件。１つ目、人権委員会っていうのを発足して生徒を動かしているというこ

とだが、どのような形でされているのか。２つ目、人権集会は年に１回の行事的なのか、それとも月に１回定期的に行われる会なのか。

報告者　１つ目、人権委員会は学校での委員会活動の一環で、希望して子どもたちは集まっている。人権委員会の生徒が集まって、日々の活動目標を決めたり、人権に絡むような活動がある時に人権の標語を考えたり、テーマを考えたりというような活動をしいる。２つ目、人権集会は学年の人権集会と、全校での人権集会があり、年に１回の行事である。コロナ禍を除いてはしっかりと継続してできている。

兵庫　その年の振り返りみたいなことっていうのはしているか。

報告者　人権委員会の活動だけではなく、日々いろんな先生方や学校全体で協力をしながら、生活アンケートなどをして、その時の子たちの気になる様子、言動を拾い上げて、子どもたちがどういう風に生活ができているのか、みんなが安心、安全に生活できているのかということを、毎月しっかり確認をしている。

協力者　人権集会は、鴨島第一中学校さんの独自の取り組みか。県や市はどういう取り組みになっているのか。どこまで広がっているのか。教員の意識づくりをどうしているか。

報告者　本校職員は、生徒の生活の様子をしっかりとよく見ている。職員室の中では生徒の様子や気になるところなどをよく意見交換をしている。気づいたことをしっかり伝え合う。何かあるから特別にするというわけではなくて、日々の活動の中からしている。人権集会は、本校独自の取り組みだと思う。

兵庫　被差別部落が校区に含まれているということで間違いないか。学校規模と、旧対象地域に、住んでいる人数がどのぐらいの規模なのか。その子たちが全校人権集会や人権委員会の中でどんな役割果たしているのか。そのことを通してどんな風に変わっていっているのか。もう少し子どもたちの様子とか教えてほしい。

報告者　中学校の人数は全校生徒が 360 人ぐらい。各学年が 4 クラスで 3 学年、 1 クラス 30 人ぐらい。教育集会所に参加している生徒の人数は、そこまで多くない。校区内に 2 か所あり、1 か所は 5 人で、もう 1 か所は 3 人で活動している。今現在学習会に参加している子たちは、人権学習の時にうつむくというよりかは、一緒に考えて意見を出す、自分はこう思うっていうことをみんなの前でしっかりと伝えられるような子たちが多いような印象。1 年生から人権学習に使う「私の願い」という冊子があり、その冊子を使いながら、人権獲得の歴史であるとか、じっくり考え、意見を出し合って、自分に戻して考えるような部落問題学習もしっかりと取り組んできているつもりである。

兵庫　教育集会所に週 2 日、教職員は交代で行かれているのか。参加に対して負担でないのか。保護者会、PTA との絡みはあるか。地域の方だけが参加しているのか、それ以外の地域の方も参加しているのか。

報告者　週に 2 日、校区内に 2 か所の教育集会所あるので、教職員が当番で順番に訪問している。ただ、都合が悪いとか、出張がある時は個人交渉で、必ずそこの活動に必ず本校の職員も参加する。学力保障を目的としているので、学習活動を行う際には小学生とは時間帯が違う。小学生の時間帯が 1 時間 30 分。その後に中学生の 1 時間 30 分がある。 6 時半から 8 時まで。学習会の行事や保護者の方を交えた講師をお呼びしての研修会は、小学生や地域の方も一緒に話を聞いて意見交換している。保護者会がそれぞれの 2 か所にあり、学期ごとに小中学校の先生と、地域の保護者の方と、指導員の方が集まって、話し合いを定期的に持つようにしている。

徳島　40 年続いたのは、人が育った、先生方が育った、生徒が育ったから。保護者にも、親が結婚差別を説得することができたというような話も聞かれる。PTA の取り組みもしっかり行われていている。徳島県では、多くの学校が人権集会をしている。教員は、今の差別問題を解決していく生徒を育てているという誇りを持っているのだろう。徳島県の同和教育の方向性を定めてくれたのが当時の鴨島一中だった。

徳島　鴨島一中の校長。人権集会においても、厳しい立場にある子どもたちが自分の思いを出

して、その思いに周りの友達がつないでいく、それでみんなで支えていく。その取り組み自身が吉野川市の各中学校の人権学習の新しい発信をしていると思う。

兵庫　1つ目、道徳教科化で、同和学習や人権総合の時間が非常にタイトになってきた。どれくらいの時数でしているのか。2つ目、西宮市でも人権作文を全員に書かせているが、代表の生徒は、どのように選出されるのか。全員がその取り組みをしているのか。

報告者　多くて3時間、4時間ぐらいを事前学習として充てていた時もあった。体験をし終わった後に、学んだことをまとめる事後学習をしている。年によっては、小グループに分けて活動するので、そういう年には、全体で学びを共有するため、全体でポスターセッションのような形で、発表して学習を深めていく形を取るので、合計すると10時間以上は使っていた。人権作文は全員で書く。内容は、自分がこれまでにしてしまった体験であるとか、された体験を書いてくる子もいれば、人にはあまり広めたくないんだろうなというような内容など、様々なことを書いてくれている。クラスによっては、発表会をする場合もある。各クラスの代表を決める時には、担任がしっかりと読んで、全体の中で考えていこうかなという内容の生徒に、「みんなで一緒に考えていっていいかな」と声をかけて、クラスの代表を決ることもある。学年での人権集会が終わった後に、学年としての代表が全校人権集会につなげていくという形。

―報告2―㉛

深津中学校の人権・同和教育について～多様な人権問題の解消をめざして～（兵庫県人教）

―主な質疑と意見―

協力者　発展的解消というのはどういう状況だったのか。

報告者　小学校を閉校するのではなく、子どもたちにより良い学校生活、教育を送るために、いろんな地域の子と関わり合いながら教育を高めていくという認識で発展的解消を迎えている。それまでは、100％同和地区の学校だった。

協力者　解放学級が2002年まで旧芦原小学校で行われていたということだが、そこで部落問題学習や進路保障や進路展望拡大、学力保障などをやっていたということか。

兵庫　芦原小学校での校外学級が隣保館の一室を使って、2年間だけ自習室のような形で、そこに中学校の教師が割り当てを決めて、子どもたちの勉強を見るシステムを続けた時期があった。その後、地域の方とも協議をして、学力は学校で、地域学習は地域でということが西宮の合言葉のようになっている。人数は100名ほど。芦原小学校に関わって分かれた小中学校ではどこでも「学力は学校で」を合言葉にしていて、学力保障の取り組みをそれぞれの学校で工夫しながらやっているというのが今も続いている。

神奈川　小学校では総合の時間はどんな取り組みをしているのか。スタートするにあたって、先生たちが、子どもたちが本気で取り組めるように伝えていることがあるのか。

報告者　2つの小学校で人権教育や教科学習や総合でしていることを受けて、連携を取りながら中学校でも考えている。

兵庫　深津小学校では基本的には学級経営で人権教育をする。道徳で人権の視点を入れた授業もする。5年生で、人権総合参観、人権総合という形で授業に取り組んでいる。6年生も、社会の歴史から始まってという形。

協力者　先生方が1番伝えたいことは何か。

報告者　差別に出会った時に解消へ向かう実践力を培ってほしいというのは、小学校も中学校も共通している。差別や人権課題に出会った時に、適切に対応する主体性や、1人でではなく仲間とともに問題解消に向かっていってほしい。

兵庫　どちらの小学校を卒業した児童も知識として差がないように、小学校で足並みを揃えてカリキュラムを考えている。中学3年生と、小学1年生・4年生の交流では、リハーサルで私たち小学校教員と一緒に考え、アドバイスをする機会があるが、小学校の教員としては、卒業生の成長が見られるいい機会にもなっている。中学生と一緒に授業を考えることによって、私たち自身も人権意識が高まっていると感じている。

徳島　どのような経緯で小学生に対してこのような時間を持つことになったのか。

報告者　学習指導要領で総合的な学習の時間が誕生した時に、研究推進委員会を中心に協議していく中で取り組みが生まれたと聞いている。平成12年度に職員にアンケートを実施し、特色ある教育とは人権学習ではないかという声が多数上がり、当時の先生方が一から子どもたちとともに作り上げていったと聞いている。始まった当初から10年、20年の間でブラッシュアップされてきた。

兵庫　生徒は、この世の中には差別があるけども、それが実は自分たちの身近にあることは気づいてない。中学2年生の11月、12月を狙って、ずっと小学校からいろんな人権問題や部落差別について学んでいき、中学2年生で、教師が体育館で子どもたちに語ることで、子どもたちが今まで学んできたことが、ここが地域だということをはっきり言うわけではないが、私たちの身近にあるということがわかる。なぜ中学2年生のこの時期に地域と子どもたちを出会わせるのかは、2つの小学校が入ってくるので、子どもたちの繋がり、仲間作り、絆作りが、この時期に確認できているから。

協力者　小学校に行くのは昔からか。

兵庫　子どもたちと地域を出会わせる時には、地域の方に来ていただいて講演をしていただいていた。しかし、地域の方々の願いで、学校で中学校の先生がこういうことをできるようになってほしいとずっと言われてきた。教師も自分たちでやりたいという思いがあり、自分たちでするようになった。地域にかかわらず人権問題がいっぱい発生していることもあり、形を変えていこうという流れの時だった。それで過去の資料をめくっていたら、小学校に発表していたことがあるということがあって、これをやってみようと。小学1年生、4年生に種を撒いて、その子たちが中学校に入学してきて、またその子たちが人権の大切さを小学校に伝えに行く、この大きなサイクルを作りたいというのが今の私たちの思い。

愛媛　地域を出会わせるというのはセンシティブな問題だと思うが、どういう配慮をしているか。ルーツがある生徒たちは、自分の立場はわかっているのか。

報告者　全校で家庭訪問して、こんな授業するというお話をしに行けるご家庭にはしに行く。1番大切にしているのは、 授業をする私たち教職員が、目の前にその子たちがいることをきちんと考えてやること。教員に研修を開いたり、地域の方に中学校に託す思を語っていただいたり、しっかりと学びながら、目の前にその子たちがいるんだっていうことを意識している。授業後の感想は必ず当日中に読んで、何かあれば即学年会を開いて、共有して、家庭とも連携をする。授業中は必ず全職員立ち会いの下で、子どもたちの表情を見逃さないようにしている。

愛媛　地域のことは地域で学ぶということがあったが、その辺りのことで連携はできているか。

報告者　地域との連携はできている。地域学習講座が西宮全市を対象に行われていて、西宮の歴史とか、講師を招いての講演会とか、学習とかをやっている。地域学習講座の企画段階から地域の方と教師、教育委員会の方も入って企画をしている。父母の会のグループの方々とは地域の行事を通して交流をしている。その中に子どもたちも含まれていて、子どもたちと一緒に教師もやっている。

協力者　それが子どもたちの地域の認識につながっているのか。

報告者　地域の行事に来てくれる子どもたちには認識がある子も多くいる。兵庫県の西宮市は新しいマンションがたくさんできていて、転勤してきた方とかがそこにいる。地域に住んでいながら、全く認識がない保護者も多くいる。地域だということは分かっているけれど、それを子どもたちに伝えていないという家庭も増えてきている。

香川　西宮市内の学校間で高校との情報交換はどうしているか。

報告者　西宮市でも追跡調査を行っている。見ておきたい卒業生たちに対してアンケートを行い、高校1年生や大学1年生の学年の子たちに追跡調査をしている。その質問項目の中に、「人権問題に出会うか」とか「どんな勉強があったか」ということもあるが、やっぱり人権問題にも出会っているし、勉強もしている。西同教の進路保障部では、夏休みに、「高校でどういう活動がされているの

か」とか「西宮出身の子どもたちが今どんな生活をしているのか」という追跡も兼ねて高校訪問をしている。

香川　中学校間での連携はどうしているか。

報告者　西同教の中学校部会というのがあり、そこで中学校の先生一同に会して、自分たちの取り組みを持ち寄って交流をする機会がある。

兵庫　自分は西宮の中から絶対に同和教育の火を消してはならないという決意である。西宮の教育は、同和教育に始まり同和教育に終わると言われている。芦原地域の中学校に勤務した以上はどっぷり人権教育に浸かって、しっかりその意義を理解して、推進できる教員に育ってほしいと毎回の職員会議で伝えている。

―1 日目総括討論―

徳島　吉川市の人推協の方たちは、すごく熱心な方たちで、本当に差別をなくしていこうと一生懸命取り組んでいる。全ての小学校区の地域の人がたくさん集まる。小中共に活動している。教育集会所の保護者会がしっかりと教師と話している。教員にはもっと積極的に地域と関わってほしい。

徳島　2004 年平成の大合併の時に、学習会を今後どうするのかすり合わせをした。保護者や地域の強い願いがあり、吉野川市でも署名活動が起こり、学習会を今後も続けていこうということで、現在、吉野川市学習会規則というのがあり、市から補助金も出ている。行政の支援も必要なことだと思う。

兵庫　西宮市は兵庫県で 2 番目に大きい部落がある地域。今、差別の実態が見えにくくなっている。しかし、実態はある。地域の中でも新しい住民との交流もなかなか難しくなっている。親が学んでいくことが子どもにとっての学びにつながるが、繋がっていくことが難しい。

兵庫　尼崎市でも 1988 年に同和教育を考える少集団学習を立ち上げた。発足から 35 年以上ずっと続けている。人権って重くて暗いというイメージがあるが、人権のことをやればやるほど心が軽くなって明るくなると、35 年ずっと続けて実感している。

神奈川　人権のことを知るだけじゃなくて行動に移すっていうところまで意識されてるっていうのも、本当に素晴らしいなと思う。行動する力をどう育てるかが大切。そのためには子どもがよく考えることが必要。課題解決能力や仲間との繋がりを日々の授業の中で身につけていくことが大事。

報告者（徳島）　班活動を取り入れて、自分の意見を伝える。それを周りの班のメンバーに聞いてもらう。というのを、人権学習に限らず取り入れている。そうすることによって、人権学習になっても、自分の考えを表現しやすくなるのではないか。行動する力に繋がるのではないか。

兵庫　深津中学校では、学び合いが成り立っている。仲間を認めて、苦手なことでも輝ける。そういった活動の中で、人権学習は育まれると思う。授業に限らず、学校の教育活動の中で、認め合い、苦手な部分をサポートする。そういうところからの人権は生まれていくのではないか。

京都　私の勤めている市は、同和教育に力を入れている。本校では、 人権学習を 3 年間系統的にやっていく中で、必ず同和教育を入れていく。3 年間の中でキーワードが 3 つ。学び、気づき、行動するこの 3 つの順番にやっている。自分が同和問題に出会ったのが大学の時で、日本にそういった大きな問題があるということをそれまで知らなかった。今の学校に赴任したら、熱心に教育しているので、自分もしっかり学ばないといけないと思った。当事者の方と出会うことは、自分の実体験からしても、すごく心に残る。今日のことを学校に持ち帰って、色々な先生と共有するという行動から始めたい。

京都　まだまだ、今日は自分の知らないこともたくさんあり、同和教育に関してもまだまだ勉強不足なところもあるので、勉強させていただいたことを、また、次回の教育実践に生かしたい。人権教育は、真剣にやると楽しかったり、面白かったりするもので、暗くて重たいものではないという言葉が、すごく印象に残った。

京都　人権同和学習をしている中で、生徒たち

を見ていて、この子たちは自分のルーツのことを知っているのかなと最近よく思うことがある。教育に携わるものとしてどう接していったらいいんだろうとちょっとモヤモヤしていた。ここでいろんな意見を聞いて、自分だけじゃないのかなと思えたことで、すごく勇気をいただいた。

―報告３―㉝

多文化共生を楽しもう！～教育文化研究所における多文化共生教育研究委員会の活動報告～

（神奈川県人教）

―主な質疑と意見―

神奈川　神奈川県に在住する外国ルーツの人は、1990 年代くらいまでは中国ルーツや在日コリアンの方が多かった。今は散在していて、国も様々。急な変化に行政もついていけていない。箱根町で 6%ぐらいが外国籍の方。相川町はもうすでに 8%外国籍の方。前にブラジルからの転入生を担任していた。翻訳機能を使ってやりとりしていたが、本心は語りづらい環境で、子ども同士の関係性をうまく繋げず、孤立させてしまったことが心残りである。自分自身組合の学習会に参加して、気持ちに変容もあった。

協力者　この教育文化研究所というのは、 文化に特化した研究所ということか。

報告者　教育文化研究所は、困った時に何か悩みを共有できたり、先生方が同期がいなくて困ってるとか、どんな学習をすればいいのかわかんないってところで立ち上げた。

協力者　ME-net というのは、 神奈川県全域でネットワークを組まれているということか。

報告者　ＭＥ-net は元々高校教員の方が立ち上げた NPO。外国につながりのある子どもたちやその保護者の方のために、高校入試についていろんな言語に翻訳をしてタブレット等に出している。日本語を母語としない人たちの高校進学ガイダンスというところで 情報共有の方を行っていて、教員自体もこれに参加できるようになっている。担任をした子どもに対してどんな支援ができるのか知りたいということで教員の参加がある。

神戸　神戸では教育実践研究グループがある。その中に、外国語と国際教育のグループがある。多分化共生に関する事情を考えて、実践する。そういうグループが神奈川にもあるのか。今年は外国籍児童の困り感をみんなで体験しようという授業が計画されていた。すごく良かったと思ったので、もしそういう授業に関することが、情報があれば教えてほしい。

報告者　学校単位で小学校教育研究会があり、教科のことを研究していたり、それ以外のことをやっていたりする。そのうちの１つに国際教育がある。外国に繋がりのあるお子さんに対してどんな支援をしたらいいのかを共有する場等もある。

神奈川　神奈川国際交流財団というところで、外国に繋がる子ども、若者の教育ということで取り組みをされている。教育関連として、外国に繋がる生徒の高校進学サポートガイドや、ホッとする授業作りみたいな形で、資料等もホームページでダウンロードもできるような形になっている。

大阪　本校にも様々な国にルーツのある子どもたちがたくさんいる。子たちにとって安心した場所であったり、互いにこう違いを認め合える仲間づくりだったりを大事にして取り組みを進めている。出会いのところでまず知るということがすごく大事。いろんな国の文化だったり、遊びだったりを子どもたちに体験してもらう。堺市では、ルーツのある子たちが集まる会もあれば、 ルーツのある子だけじゃなくて、小中の子どもたちがみんな参加できる会もある。孤立してしまう子どもたちが悩みを相談できる場がすごく大事。保護者の悩みやこんな声があったよっていうところもしあれば教えてほしい。

報告者　保護者の方は、日本に来てもやはり文化になかなか馴染めないなど、違いがすごく大きく出る。例えば、雨が降ると心配だから学校に行かせたくないっていう思いがある。国によっては少しの雨でも近くの川が氾濫をしてしまって、危ない思いをする。私たちも想像できないところにはそういったお話もある。あと、プリントとかが本当にわからないという声があっ

た。保護者の方は、何が必要かがわからないとお声をいただいた。本当に伝えなきゃいけないところは、マーカーをして、ここだけ訳してくださいっていう風にちょっと通訳を入れてもらった。

兵庫　武庫川団地という、その団地だけで校区が成り立っているところがある。そこには、日本語指導が必要な子が約 5%から 8%ぐらい、外国にルーツを持つ子が 15%ぐらいいる。団地の方で立ち上げた日本語教室がある。阪神淡路大震災の時に少しトラブルがあり、このままではだめということでやり始めた。子どもの学習で募集するが、本当の意味は、お母さん連れてきてやってと言って親を集める。子どもの学習支援と保護者の活支援とを地域の方が中心になってやっている。ブラジルルーツの保護者で、グループを作って、 学校からの発信がみんなで共有できるようにしていることもある。line グループは、親と繋がるので良かった。遅刻が多いお子さんの母が「私は頑張っている」と怒鳴り込んできたことがあった。同和地区の親が言ってるのとすごくかぶる感じがあった。また、自分が子どもと喋ってるのを地域の中で笑われたと思って来られたお母さんがいた。自分は子どもに日本語も母語も話せるようになってほしいと言っていた。子どもはダブルリミテッドになっている。そういう問題もまだまだある。

神奈川　進路指導の時に困ることが多くなる。どういう制度があるか、大人が少し導いてあげることが大切。その地域のお母さんたちのコミュニケーションで説明してくれる人がいるので、そういうところがあることを我々が知ることが、大切。親とのパイプを見つけることが大切。子どもが親を超えた時に、どうサポートするか。行政などのサポートを知ることも大事。

―報告４―㉜

ぼく　甘えてました～寄り添い、支えていく中で、成長していくタケシ～（大阪市人教）

―主な質疑と意見―

大阪　タケシの家庭環境や、学校と家庭の連携など詳しく教えてほしい。

報告者　タケシには父と母がいる。父と母は別々のところに住んでいた。3 年生の時は父の家に住んでいた。父は何年か前に病気になって仕事を辞めている。耳も聞こえにくくなっていて、父とのやり取りもなかなか難しい状況だった。兄弟がたくさんいる。1 つ上のお兄さんが中学生。そのお兄さんは不登校傾向があった。その他のお兄さんやお姉さんは、もう家を出ていて、それぞれ家庭を持たれていたり、大学や専門学校に進学されたりと、もう家にはいてない状況だった。

別に住んでいたお母さんが、お母さんの職場の目の前のアパートを借りて、 朝早く出勤できるようにしていた。タケシが、夏休みからお姉さんの家に行くようになった。母のアパートの目の前にお姉さんも家を借りていて、お姉さんもお母さんと同じ介護施設で働いていた。家庭とのやり取りは、お父さんに電話をしても繋がることが難しくて、電話で伝えても耳が聞こえづらいということで、直接お家に行って、大事な書類については連絡を取っていた。お母さんの家に移るようになってから、お母さんも学校からの連絡を取ってくれなくて、すぐ目の前に住んでいるお姉さんの娘が今小学校に上がってるが、そのお姉さんに連絡を取ってお母さんに伝えてもらう形で、家庭とのやり取りはしている。

大阪　長橋小学校の校長。本校の教育目標には、人権感覚を身につけて、差別を許さず、打ち勝つ子どもの育成というところで、人権教育を中心に、学力向上の推進、仲間づくりの推進を進めている。50 年代、60 年代の大衆運動、住宅闘争であったり、地域でどのような闘いがあったのかということから学び、勝ち取った生きる権利や基本的人権の獲得であったり、当時の人の思いや努力を伝え聞いて学んでいる。現在西成区は、西成特区構想があり、独特の課題を抱えている。生活保護率の家庭が、半数程度という状況。厳しい生活背景がある。行政と地域が連携して、子どもたちを見つめていく。

兵庫　「僕、甘えていました」と 4 年生の子が泣きながら言うのは、結構重みがあると感じるが、先生とタケシさんがどんな話をしたのか。また、発表を聞いてタケシさんはすごく優しいと感じ

た。タケシは自分のこと好きでいれているのか。その中で学校での取り組みがあれば教えてほしい。

報告者　毎日毎日、迎えに行かなかったら来ない日が続いていた。自分が迎えに行かなかったら、タケシはどうなるのだろうという思いだった。家庭の様子を見ると、すごくものがいっぱいあるし、虫もいるし、このままではタケシ危ないという思いで迎えに行っていた。タケシに、「毎日迎えに行ってるけど、ほんまにこれでいいの。僕が迎えに行ってる間はもう１人の担任が前で授業を進める。本当なら２人の先生にみんな教えてもらえるけど、ここに先生が迎えに来てるってことは、１人の担任の先生しか勉強を教えてもらえない。そういう状況に毎日なってるんやけど、ほんまにこれでいいの。」と話した。すると、 ボロボロ涙を流し始めて「僕、甘えてました」と言った。甘えていい存在が、タケシからしたら「僕ばっかり甘えてた。他の子も甘えられるのに僕だけ独占してた。」とタケシは捉えてくれて、「僕もやっぱり頑張らなあかんな。しんどいのはみんな一緒やし、助けを求められるのはみんな同じ機会があっていいのに、僕ばっかり甘えてました。」と感じ取ってくれた。タケシが自分のこと好きか、そのためにどんなこと取り組んでるかというところで、毎年「自分のこと好きですか」というアンケートを取るが、タケシがなんて答えてたか覚えていない。多分、好きな時もあれば、自分なんてと思っている時もあると思う。 自分のこと好きになってくれるような学年の取り組みとしては、いいところ見つけであったり、朝の会に今日の１日のシークレットフレンドを引いて、その人のいいところを見つけて帰りの会に発表したりしている。ペアワークをしていっぱいお話をして相手のことを知る取り組みをクラスの中ではしていた。学校全体として「いいねカード」を書いて、それを、友達に渡して、職員室の前とかに掲示して、クラスのいいねカードみたいなのをいっぱい掲示していく。それに対して、「サンキューカード」と言って、いいところを見つけてくれてありがとうみたいな返事を書く。それをまた掲示するみたいなのを学校全体で取り組んでいる。多文化共生を取り組みで、フィリピンや中国に繋がりのある子どもたちの活動を月 1 回 やっていて、その子たちの文化とかを紹介したりしている。民族学級でも一人一人の良さを見つけるような活動をしている。

協力者　学校と地域がどのように連携しているか。

大阪　長橋小学校人権担当。学校の方と地域の方の連携ということで、子ども食堂が校区内にある。市民交流センターが西成区でもあり、そこで居場所づくりとして始められたと聞いている。そこに川辺さんという方がいらして、子どもの居場所事業をしてくださっている。小学校の方に毎週火曜日、朝の読み聞かせに来ていただいている。子ども食堂に子どもたちも行ってるので、本校の教職員もそこに行ったり、情報交換をしたりしている。また、識字教室も行われていて、小学校の方からも行かせていただいて、地域のことを学ばせていただくということもある。それ以外にも、解放同盟の西成支部があり、そこと共同して様々な勉強会を行なったり、子どもの居場所事業、学習支援、生活支援をしたりしている。そことも密に連携をとっている。2 年前からは、図書室の開放を地域の青年の方にしていただいて、そこで地域の青年と子どもたちが繋がり、みんなで見守っていけるような、地域と学校が共同する取り組みをしている。さらに、西成区では、要保護児童生徒対策協議会というのが毎月とられていて、区役所や関係諸機関、児童相談所とか、学校が連携している。

兵庫　１つ目、学習の厳しい現状をどうフォローアップしていくのか。２つ目、進学や就職など、子どもの進路はどうか。３つ目、教員同士でも温度差はないのか。先生方とのコミュニケーションなど、どのように取り組まれたのか。

報告者　1 点目の学力について、本校は大阪市の経年調査でも、大阪市の平均よりもかなり学力がしんどい状況。今現在、大阪教育大学の方と連携をして BPS（ポジティブ行動支援）を用いて、学力を上げるために日々取り組んでいるところ。積み残しに関しては、放課後残って、クラスのほとんどの子が下校時刻のギリギリまで残って、宿題を担任の先生と一緒にやったり、ちょっと苦手なところを一緒にやったりして、クラスみんなで一

緒に頑張っていくみたいな雰囲気で取り組んでいる。教職員の温度差に関して、正直私自身が本校に赴任したとき、1 歩引いた部分がすごくあった。なんでここまで、この先生してるんやろう、何のためにしてるんかなっていう部分がかなりあった。毎朝 8 時半ぐらいから出欠確認取ったら電話の取り合いで家庭に連絡をしていて、「何をしてるんだろうこの朝の朝学習の時間に」と思う部分がかなりあった。ただ、それをすることによって、5 分後に 1 人来て、10 分後に 1 人来てって、どんどん子どもたちが学校に来られる。いい顔して勉強してる姿を見て、続けていくことに意味があって、ここまでして来られる。子どもたちが学校で勉強して、学校に来る意味っていうのを、先生たちが伝えていってるんだな、大事なことなんだなということを勉強させてもらってきた。やっぱり転勤されてきた方、みんなが同じように、これはなんだ？となっているが、日を重ねるごとに変わっていっている。また、毎月、子どもの背景とかをみんなで話し合う会議 が持たれていて、学校全体で課題を共有してるのがとても大事なのかなと思う。

大阪　小学校と中学校の人権教育主担が、月 2 回連携をとっている。細かいところまではわからないが、高校進学率は、ほぼみんな行く状況。大学進学率は、高くはないと思う。追跡調査は、この地域では行っていない。ただ、地域に西成高校という高校があり、そちらも連携協力校として、月 2 回、連携を取りながら、西成高校の状況は聞かせていただいている。西成高校は、すごく手厚く進学についてサポートしてくださっていて、ほぼ就職はしていると聞いる。途中で辞める子も、中にはいてるが、退学率もかなり低くなっている。西成高校では、反貧困学習という取り組みを進められたりして、自分たちで生活をしていく、自分たちの特技を持って生かしていけるような就職につなげていってくださっている。学力について、本校ではスマイル教室という放課後の学習支援を、地域やサポーターの方にお願いして行っていただいている。また、塾代助成が西成区ではあり、塾に通うことが難しいご家庭に支援があったり、夏休みには夏期教育活動と言って、学習支援を、7 月の夏休み始まってしばらくの間、学習支援をおこなったりしている。

―2 日目総括討論―

大阪　長橋小の発表で、タケシがくさいと言われた件があったが、タケシの生活自体をどうしていくかという議論はあったのか。また、遅刻することをなんとかしようということを「甘えてる」というような言葉で表現されているが、きっと学校の教育をこの子に届けたいなという思いがあっと思う。そこに学校の中での論議みたいなことも教えてほしい。

報告者（大阪）　タケシの家にお風呂はないが、お父さんは毎日銭湯に行っている。お父さんはタケシに対して、「一緒に行くぞ」と誘ってくれている。でも、タケシ自身がまだ友達と遊びたいとか、もうちょっと家でゲームしたいとかで、断っていたりして、そこに関しては、タケシの怠慢な部分もあった。ただ、周りの子たちは、実際に匂いを感じて言っていたわけではなく、鬼ごっこをしていて、こっちやでみたいな感じで、追いかけてもらうために、臭いっていう言葉を使って呼んだ。ただ、その言葉の使い方っていうのは、よくなかったという指導をした。地域には銭湯がいっぱいあるが、なぜ銭湯ができたかという教材を使いながら指導した。洗濯に関しては、僕も家に行った時にちょっと匂いするなっていうところがあった。タケシにも、洗濯した方がいいんちゃうという話をして、洗濯をして、そこに関してはタケシ本人も気づいてくれた。今はわからないが、4 年生の終わりまではちょっと掃除を頑張ろう、服を畳んで直そうという部分が家行った時に見られた。課題としては、お風呂に自分で入らなあかんという気持ちに変化させられるところまで行けていなかった。甘えている論議に関しては、自分もとても悩んだ。学校の中でも、それは必要な部分じゃないか、いやいや、でも自立させなあかんからという議論がよくある。でも、これをしなかったら、彼はどうなるんだろうという思いが強くて、ついついやっちゃう。でも、それが逆にお節介だったみたいな部分も多々あるので、まだ自分の中では自信を持って、僕はこうなんだって思え

るようになるまで、支えていきたいなとは思っている。

大阪　「臭い」という話について、長橋小学校の中では住宅闘争があり、お風呂のない家庭があって文化温泉ができたという背景を低学年の時から学んでいく。それを学んでいながら臭いという発言があり、その背景に何があって、入りたくても入られへん人もおるんちゃうかっていう話をそれぞれ１人１人にして、もしそうやとしても、どう感じるんやろうなっていうところは話した。しかし、タケシが自分が変わるというところまで持っていけてなかった。本人が変わっていく手立てを、もっと考えていかないといけないと感じた。甘えているっていう論争について、2 人で結構議論した。タケシの家庭はすごく複雑で、そんな中で、甘えられる存在がいてなかったのではないかと捉えていて、その甘えられる存在が報告者だったのではないかと思っている。甘えられる存在がいてたからタケシは変わったし、その甘えられるような信頼を得れるぐらい寄り添ったから、 タケシは変われたんじゃないかと思う。それは寄り添いだと思うので、必要な支援だった。ただ、これがいつまでも続くわけじゃないので、自分の力に変わって、自分で立ち上がれるようになった時に見守るに変わっていく。そのあたりは、いつまでやるのか、 どこまで必要なのかは、すごく難しく葛藤がある。

兵庫　父子家庭で複雑な家庭背景を持った女の子を持っていたことがある。父は朝晩の食費として 500 円だけ置いて仕事へ行く。本人は貧血で倒れることもあった。朝はなかなか来られないので、毎朝モーニングコールをしていた。ここまで関わっていいのかなという思いがあった。家に呼んでご飯を一緒に作って食べたこともある。その子が卒業文集に「自分は甘えていたこともわかっている。そのことを無駄にしないで私は歩んでいきたい。」と書いてくれた。その時には、公平性を欠くのではないかとか、そこまで関わっていいのかと思ったけど、 長い目で見た時に、あの時のあの関わりがあったから、その子の支えになったかもしれないと思った。

大阪　寄り添うことがすごくやっぱり大事なことだと思う。寄り添うことで、子どもの抱えている背景が見えてくるし、見えていないところを大切にして、その子のために何ができるかとか、どう成長してほしいかとか、考えてやっていくと楽しさも見えてくる。また、子どもたちが生まれ育ったところを誇りに持ってほしいし、その良さを発信できる子どもたちに育てていきたいと常に考えている。本校の子どもたちも様々な課題を抱えている。部落にルーツのある子や、外国にルーツのある子、ヤングケアラーの子もいる。その中では、当事者だけでなく周りも変わらなければいけない。一緒に活動できる仲間を増やすことが大事。差別は見えにくくなっているが、直面する差別はある。周りが変わらないといけない。

神奈川　1984 年に教員なり、厚木にある通信制高校に赴任した。同和教育の研修会があったが、その時自分は、何か難しいことだし、関わると何か巻き込まれていくんじゃないかというような感想を持った。また、街中で障害を持った方たちと出会った時に、どう関わっていいかもわからないので、関わらないようにしようみたいに思っていた人間だった。今振り返れば、自分が差別をする側に立っていたんだと思う。全同教大会がきっかけで、厚木のムラと関わることができた。神奈川県は、少数点在のムラで、ムラの子と出会うということが難しい。90 年代に教員が差別事件を度々起こすということがあった。そういう中で、県の教育委員会も協力して、人権教育推進協議会というのが発足した。2011 年に全同教に加盟した。全同教が培ってきたいろんな実践をそこから学んで神奈川でも少しずつでも広めていきたい。

大阪　僕自身も若い頃に、全同教に行くぞという先輩らに言われて連れて行かれた。自分の生活を犠牲にして子どもと関わる先輩がいたが、今はそれは厳しいのではないか。しかし、子どもに対する根本は今も昔も一緒。昔は学校だけでやっていたことを、福祉組織などと連携して、システム化して今の時代に合わせていくことも大事。気になることは、全人教に参加する人の年齢層が高くなっていること。若い人をどう繋げていくかが課題。大阪市は学校選択制が導入されている。それが始まった時から、本校の学力ががたっと落ちている。

地域で本校が避けられている傾向がある。これは合法的な越境ではないかと思う。

神奈川　神奈川県では部落が身近でない。見えづらい。勉強するが、どこか自分ごとではなかった。今回参加して自分ごととして学べた。南米から来た子どもが、日本語ができずにいじめられたことがあった。結果、不登校になってしまった。学校にも不信感を持っていて、市内の学校を３、４回転校した。市内に夜間中学校が開設されたときに、その子が入学した。そこで信頼できる大人と出会うことができ、日本語も話せるようになった。最後にはリーダー的存在となって卒業していった。頼れる場所を作っていくことが非常に重要だと感じた。

兵庫　ひと昔前の三倉小学校のことを思い出した。家が散乱していて、生活の躾もできていない。毎日のように教員がお迎えに行っていた。当時から父母の会があるが、保護者のしんどさはあまり変わっていない状況。そこで先生への学習会を開いたりしている。また、保育を守る会や地域子育てネットワーク、子どもの見守りなど、様々な取り組みを地域でやっている。地域の子どもは大人が守っていかなければならない。

大阪市　地域に子ども食堂がある。子ども食堂には保護者も行くことができる。しんどい家庭の保護者は子ども食堂ともつなげるようにしている。そうすると地域とつながることができる。そこに教員がいったときに、保護者からいろんな話を聞くことができる。学校としてはすごく心強い。

報告者（徳島）　今回、学校の取り組みを振り返るいい機会になった。「寄り添うってどういうことだろう」と子どもたちと考えていきたい。苦しんでいるときに、相手の立場に立つ。それが本当にできるのか？と子どもに聞くと固まる。それは自分の心と向き合っていたのだと思う。一人では難しいかもしれないが、この仲間とだったら戦えるかもと思ってほしい。

兵庫　自分自身が大阪出身で、子どもの頃に人権教育を受けていて、部落問題の知識はあった。しかし、長年住んでいながら西宮に大きな部落があることは知らなかった。教員になって、目の前の子どもがいて、勉強しなあかんと思った。子どもは遠いことだと捉えている感想も多い。しかし、出会った時にその子の困り感に立ち向かえるようにしたい。